



社会福祉法人
中野区社会福祉協議会

社会福祉法人
中野区社会福祉協議会

創立70周年 記念誌

区民とあゆんだ70年

社会福祉法人
中野区社会福祉協議会

創立70周年 記念誌

区民とあゆんだ70年

目次

ご挨拶・祝辞 ————— p 2

中野社協について ————— p 4

この10年のあゆみ

① 多様な交流の場づくりを進める ————— p 6

② 幅広い層が担い手になる ————— p 10

③ 困った時に助け合える地域をつくる ————— p 14

④ 解決しにくい課題にみんなで取り組む ————— p 20

中野社協のあゆみ 中野社協年譜 since1953 ————— p 26

データブック データで見る中野社協 ————— p 28

名簿一覧 ————— p 30



ご挨拶



創立70周年を迎えて ～想いをつなげよう 広げよう 未来へ～

中野区社会福祉協議会
会長
吉成 武男

中野区社会福祉協議会は、社会福祉法に基づき、中野区の地域福祉推進を目的に設立された団体です。戦後の荒廃から立ち直り始めた、1953(昭和28)年10月に、当時、野方にあった中野区役所福祉事務所の一角から出発し、1962(昭和37)年には社会福祉法人の認可を得ました。そして、今年無事70周年を迎えることができました。これまでの本会の会員をはじめとする多くの区民の方々、民生児童委員、町会・自治会、中野区等の温かいご支援に深く感謝申し上げます。

本会は民間団体でありながら、公的な役割を持つ性格から、国の社会福祉の制度や、中野区の施策の影響を受けやすく、事業内容や組織もその都度変容させてきました。その中で、2004(平成16)年からは地域福祉の原点に戻り、「住民の身近で信頼される存在」になるよう事務局職員による「地域担当制」を開始しました。また、2014(平成26)年に策定した第3次中野区民地域福祉活動計画(いきいきプラン)では、「社会的孤立を生まない、人と人がつながる地域づくり～MEをWEにする～」を基本目標として、「孤独・孤立」が今日の地域課題の起因と位置づけ、まちなかサロン事業、福祉何でも相談窓口の開設など、地域のつながりづくりを地道に、しかし、着実に区民の皆様、関係者の皆様とともに進めてまいりました。

残念ながらここ数年のコロナ禍により、地域の交流の機会の減少や地域活動の停滞を招き、本会や地域団体の取り組みも影響を受けざるを得ませんでした。つながりの希薄化が一層進み影響は残っていますが、私たちは次の世代へバトンを渡せるよう、未来のある地域社会を創っていく必要があります。地域に携わる関係者の皆様とより一層連携を深め、「中野に住む誰もがその人らしくいきいきと暮らせるまち」を目指して取り組んでまいります。皆様の引き続きのご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

祝辞



中野区長
酒井 直人

この度は、中野区社会福祉協議会が創立70周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

中野区社会福祉協議会が設立された当時は、戦後復興のさなかであり、大変なご苦労があったことと思います。その後、昭和37年には社会福祉法人として認可されました。昭和59年に中野ボランティアセンターを開設、平成2年にほほえみサービス事業を開始、平成16年にアシストなかの、平成20年に成年後見支援センターを開設し、高齢者困りごと支援事業を開始、平成21年にファミリーサポート事業、平成22年に法人後見・後見監督事業、平成27年にあんしんサポートや福祉何でも相談を開始するなど、地域の中で困っている方の生活を支える様々な取組を進めてこられました。

近年、高齢化の進展や認知症の増加、ひきこもりや地域での孤立・孤独等により、地域で安心して暮らし続けていくために様々な支援を必要とする方が増えています。貴協議会におかれましては、地域担当を設けて、福祉何でも相談や地域福祉のコーディネーターの役割を担う等、地域包括ケアの最前線で福祉の向上にご尽力頂いていることに、深く感謝しております。

今年度は、区の策定する地域福祉計画や社会福祉協議会の区民地域福祉活動計画等の改定を行う時期に当たります。地域福祉推進の中心的な役割を担う組織として、今後も中野区と連携し、地域福祉の向上にご協力をお願いいたしますとともに、益々のご発展をお祈り申し上げます。



中野区議会議長
酒井 たくや

この度は、中野区社会福祉協議会創立70周年、誠におめでとうございます。

日本がまだ第二次世界大戦後の復興期にあった昭和28年に設立され、昭和37年には社会福祉法人格を取得しました。高齢であっても、障害があっても、病気になっても、誰もが安心して暮らし続けられる「中野」のまちの実現のために、中野区民の地域福祉活動を推進する中核的な組織として活動し続け、ボランティア活動の推進や地域での支えあいによるサービスの提供、相談事業など、さまざまな事業活動を展開し、本来区が担うような福祉のまちづくりを、住民主体で進められてきました。

そのような、地域に根差した地道な活動は、区民の安心につながり、中野区社会福祉協議会に寄せられる期待は、今後も一層高まるものと思われます。

歴代の会長や役員、職員、そして会員の皆様の今日までの長きにわたるご貢献に、心から感謝と敬意を表するとともに、区民の心の拠り所として、「また明日ね」の笑顔が繋がる街のために、今後ともお力添えをいただきますようお願いいたします。

私ども中野区議会も、少子高齢社会の中で、誰もが安心して暮らし続けられる中野区の実現に向け、地域福祉の推進に全力で取り組んでまいります。

結びに、中野区社会福祉協議会の今後の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝、ご多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

中野区社会福祉協議会（中野社協）とは

「わたしたちがいつもいきいきと暮らすために」を基本理念とし、高齢になっても、障害があっても、自分らしく住み慣れた地域で暮らすことができる地域づくりを進めています。地域課題を解決するために、区民の皆さん、関係機関、地域団体等と協働し、新たな仕組みづくりや住民同士の支えあいなど、自主的な活動を進めています。

地域福祉活動計画（いきいきプラン）とは

中野区民地域福祉活動計画（以下「活動計画」という）は、「誰もが住み慣れた中野のまちで安心して住み続け、その人らしくいきいきと暮らす」地域社会の実現をめざし、中野社協が区民、関係機関、地域団体等とともに総合的、計画的に地域福祉を推進するために取り組むべき方向を明らかにするものです。

これまでに、中野社協は、第1次（1994年度）、第2次（2004年度）と10年毎に計画を策定し、その時々々の社会福祉制度の大きな改革や社会経済情勢がおよぼす地域の生活環境の変化等、地域社会を取り巻くさまざまな福祉の課題解決に向けて取り組んできました。

第3次計画（2014年度）は、中野社協が60周年から70周年に向かうこの10年の地域福祉の取り組みを示すものとなっています。この10年は、「社会的な孤立を生まない、人と人がつながる地域づくり」をテーマに、一人ひとりが地域につながりを持ち、困った時に助け合える関係ができるまちを目指しました。

第3次中野区民地域福祉活動計画の取り組み

第3次計画は、4つの重点目標を定めました（右図参照）。4つの重点目標は、それぞれが関連した取り組みとなっています。例えば、重点目標①多様な交流の場づくりは、地域の人同士が自然とつながる場をイメージし、「まちなかサロン」を中心とした居場所づくりを拡げていきました。居場所が増えることにより、交流が生まれ、人と人とのつながりも拡がり、困った時に助け合える関係づくりにつながっています。

また、地域には様々な課題があり、公的なサービスにつながるまでのSOSが発信できない人もいます。まずは「困っている」という事を受け止める窓口として、2015年度には「福祉何でも相談」を立ち上げ、解決しにくい課題に地域の皆さんと取り組みを進めてきました。

それぞれの重点目標への取り組みから、この10年で新たな活動も生まれました。それらは、社協だけではなく、多くの区民の皆さんや地域団体の協力なくしては拡がりませんでした。

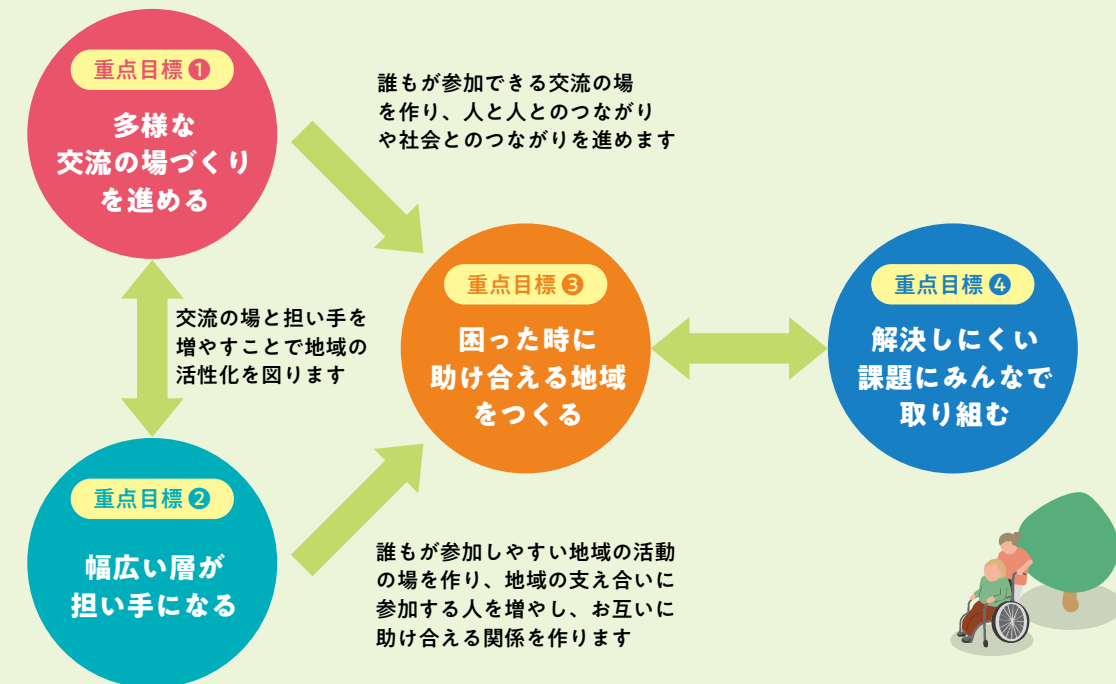


基本理念

わたしたちがいつもいきいきと暮らすために

社会的な孤立を生まない、
人と人がつながる地域づくりを目指す

下記の重点目標に取り組み、基本理念の実現を図ります



新型コロナウイルス感染症の拡大

第3次計画の10年間で、全く想定していなかった事態が起こりました。新型コロナウイルス感染症の拡大です。コロナ禍では対面での活動ができなくなり、地域活動が停止しました。仕事を失う人も多く、生活困窮者が増大しました。コロナ禍の約3年の中で、地域でもイベントや集まる機会が失われ、社会的孤立・孤独の問題がさらに深刻化しました。

第4次中野区民地域福祉活動計画に向けて

2023年度は第3次計画の最終年度となり、次の第4次計画に向けて検討を進めています。「社会的孤立を生まない、人と人がつながる地域づくり」をさらに進めていくために、「人と人とのつながり」や「地域とのつながり」とは何かを考えています。

コロナ禍もあり、対面だけではなく、多様なつながりが求められています。地域での顔の見える関係や人と人、地域とのつながりはだれもが必要だと改めて感じています。中野社協は、そのきっかけづくりや横のつながりを、これからも皆さんと作っていききたいと思います。



この10年の
あゆみ① 多様な交流の場
づくりを進める

地域に広がる多様な「居場所」

10年前、中野社協では「身近な地域に多種多様な交流の場があり参加できている」という中野の未来像を描き、それを『多様な交流の場づくりを進める』と活動計画の重点項目のひとつとして掲げました。

この「交流の場」として、中野社協が取り組んできた「まちなかサロン」は大きく発展しました。サロンに参加したい方、サロンを開きたい方に職員が寄り添って支援した結果、事業開始から77か所が立ち上がり、ピーク時には40か所を超えるサロンが区内各地に広がりました。

また、区内にはまちなかサロン以外にも、様々な居場所活動と言える自主グループがあります。中野社協ではこうした「地域の居場所情報」を収集して区民をつなぎ、多様な居場所活動が展開されるよう応援しています。

こうした居場所活動も新型コロナウイルスの影響を大きく受けましたが、「こんなときだからこそ、つながりを絶やさない」という思いで、コロナ禍を乗り越えています。



まちなかサロン「ふれあいカフェ」



まちなかサロン「あなたの実家 ききみサロン」

明日を生きる元気をもらえるところ、それが「居場所」。



佐谷 けい子さん

中野社協評議員。元中野ボランティアセンター職員。長年にわたり、地域のつながりづくりのエキスパートとして活躍。

私が社協で携わった仕事はいくつもあるけれど、「まちなかサロン」はとても魅力的でした。

当初は、個人のお宅を開放してもらって、できるだけ少人数で「今日、あの人来ないね」ということがすぐわかるような規模のサロンを拡げようとしていました。大人数を受け入れる場所やイベントは行政が手配できますが、個人宅の開放を狙えたのは、歴代の社協職員が、地域の方と近いところで脈々と信頼関係を築いてきたからこそじゃないかな。実際にその思いに賛同してくれた方が自宅サロンを開催して、こうして続いているんだからありがたいですね。

まちなかサロンに限らず、自宅とは別の身近な「居場所」は、明日への活力となるエネルギーを吸収できる場だと思います。楽しくおしゃべりして「あそこのお店はいいよ」なんて話があるかもしれない、おしゃべりしなくても、中野のいろんな情報をもらえるかもしれない、お茶を飲んでほっとできるかもしれない。

そんな「さあ、また明日も頑張って生きてくぞ」というエネルギーを生み出す場だと思う。まだまだ「居場所」の可能性は広がりますよ。

まちなかサロンから始まった地域の居場所づくり

2002年、中野社協は「まちなかサロン事業」を開始しました。区民が思い描く「こんな居場所を作りたい」という思いに社協職員が寄り添い、主に自宅の居室を開放して地域住民が交流できる場を増やすというこの事業は、一人暮らし世帯が多い中野においてその意義は大きく、サロンオーナー自身の孤立解消や介護予防、地域のネットワークの拠点になりうる点でも注目されてきました。



まちなかサロン「ほっとサロン南口」

多様な40ヶ所以上のまちなかサロン

まちなかサロンは様々な形で区内に増えていきました。対象が高齢者向けのサロン、親子向けのサロン、誰でも参加できるサロン。内容も、お茶やおしゃべりを楽しむといったサロンのほかに、縫い物をするサロン、歌を歌うサロン、パソコン操作を学べるサロン、看護師が健康相談を受けるサロンなど…。気軽にどなたでも参加いただけます。



だれもがつながりを持てるサロンに

事業開始から21年、まちなかサロンを通じてたくさんの地域課題が見えています。スタッフの確保、参加者の固定化、高齢になり会場に來られなくなった方への対応。また、参加してみたいけれど、どこにサロンがあるかわからない、という方もまだまだいます。こうした課題にも、社協職員とまちなかサロンのオーナー・スタッフが一緒に取り組んでいます。

ほっとサロン南口は2013年11月スタートしました。今年で10年になります。訪問看護師の経験から、退職後は地域活動をしたいなぁ、と思っていました。知人のケアマネジャーと社会福祉士の方に、そんな思いを伝えて始めたまちなかサロンです。

思い出深いのは、当時会場をお借りした自治会長さんとの出会いでした。お年寄りが多い住宅だったこともあり、「何かできないか」といろいろお力を貸していただきました。地域のお医者様やケアマネジャーさんの紹介もあり、また、参加者がご友人を誘ってくださったりしたので、狭い集会所はいつもいっぱいでした。夏はスイカを頬張り、冬は甘酒を飲み、笑い声が絶えない場所でした。

現在は広い会場に移り、脳トレや認知症予防体操に力を入れたり、参加者やボランティアさんたちの協力でにぎやかなイベントを企画して、「楽しかった」「来てよかった」と言ってもらえるサロンを心がけています。

これからも地域とのつながりを深め、ひきこもる高齢者が少なくなり、サロンに來る人がもっとも増えていってほしいですね。

専門職の視点でつくる
まちなかサロン

地域活動者の声

まちなかサロン
ほっとサロン南口 オーナー
さとうあさこ
佐藤 朝子さん



多様な居場所、つながる居場所

中野区内には、まちなかサロン以外にもたくさんのコミュニティや自主グループ、趣味活動の団体があります。それらのグループは、単に仲間同士でスポーツや文化交流などをしているだけではなく、定期的に集まり交流しながら、ゆるやかに見守り見守られる関係を作っています。それは、まさに地域における多様な「居場所活動」と言えます。

必要とする人に居場所をつなぐ

中野社協では、こうした地域の多様な居場所活動の詳細を把握し、居場所に参加したい方を支援するために、2013年度に「地域の居場所情報収集」を開始。その情報をもとに「地域の居場所情報一覧」を発行しました。初年度は182ヶ所だった地域の居場所は、コロナ禍直前の2019年度には406ヶ所にまで増えました。

居場所活動を支援する

居場所活動をしている団体同士の交流を図る「居場所情報交換会」、実践報告を通じて団体の活動を広く知ってもらう「地域の居場所づくりシンポジウム」や「地域の居場所立ち上げ相談会」、子どもの居場所づくりに焦点を当てた「子どもの居場所ゼミ」などを開催。多様な方法で居場所活動を応援してきました。



地域の居場所づくりシンポジウム

あらゆる人に居場所があるように

2021年には、中野社協ホームページ内に「なかの情報」コーナーを設置し、地域の居場所活動に参加したい方が手軽に必要な情報を手にできるようになりました。自分にあった居場所を見つけ、人とつながり、心地よい空間を共有する。そんな居場所が今後も広がっていくでしょう。



詳しくは
「なかの情報」へ



2015年未年に、仲間と「まちなかサロンメリーさんのひつじ」を立ち上げました。このサロンは、みんなで歌を歌って音楽を楽しむサロンです。

コロナ禍で歌うことができなくても、生演奏の鑑賞会を開いたり、切手整理のボランティア活動をやってみたり、いろんなやり方でサロンを続けました。「会いたいね」という参加者やスタッフの声を大切にしたい、という思いがずっとあったからやってこれたと思います。

他にも、高齢になってサロンに参加できなくなった方のお家にこちらが向いて「弘子さんの家」というまちなかサロンを作ったり、自分の言葉で遠慮なくお話ができる場所があるといいな、と「段暖」というまちなかサロンを作りました。また、仲間と立ち上げた「トライアングル」という活動でも切手整理のボランティア活動をしたり、ゴスペルを歌ったりしています。

もしも自分にあった居場所がないのなら、自分で居場所を作る、という選択肢もあります。居場所づくりに興味がある人は、気軽に社協に相談してみるといいですよ。

「会いたいね」の声 居場所を拡げる原動力。

地域活動者の声

まちなかサロン
メリーさんのひつじ他 オーナー
ひがきあつこ
檜垣 敦子さん



コロナ禍の居場所

2020年、人とふれあうことが感染のリスクになるという特性を持った新型コロナウイルス感染症の拡大は、地域の居場所活動に大きな影響を及ぼしました。地域の方々が集って楽しく和気あいあいと過ごす、というこれまでのやり方を継続することが難しくなり、多くの居場所が活動を休止しました。これにより、参加していた皆さんの通いの場がなくなり、同時にスタッフの皆さんの活躍の場が少なくなっていました。



コロナ禍でも感染防止に努めながら活動してきました

社協の取り組み

社協では、感染症対策を作成し、スタッフと地域担当職員が話し合いを重ね、まちなかサロンの再開を模索しました。また、まちなかサロン以外の地域の居場所のスタッフの話し合いにも地域担当職員が参加したり、情報紙を通して、各団体がどのように工夫を凝らして活動しているか、情報提供を行いました。

ボランティア情報紙
「そよかぜ」特別号では、
コロナ禍でもつながりを
絶やさないよう、工夫して
活動に取り組んでいる
事例を紹介しました。



コロナに負けないつながりづくり

コロナ禍でも、屋外実施やオンラインの活用などで開催を続けた居場所がありました。また、活動は休止しても、参加者の皆さんと手紙や電話を通じてつながり続けた居場所もあります。現在では、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したこともあり、感染予防対策は続けつつ、楽しく集える居場所がまた広がっています。

南中野ボランティアコーナーでは、毎月「ランチの集い」を実施してきました。地域で孤独死が問題になり、孤立しがちな高齢のひとり暮らし男性の居場所を作りたい、という思いでスタートした食事会です。

コロナ禍の当初、「持病があるので対面活動は怖い」というスタッフの声があったので、食事会ではなく参加者への弁当配布に切り替えました。すると皆さん、「弁当だけならいい」と。食事よりも、食事会のふれあいを楽しみにしてくれていたんですね。

そんな声をスタッフに共有したら、やはり会食形式に戻そう、となりました。その代わり、消毒や検温、換気などは徹底しました。黙食も全員で頑張りましたよ。スタッフの皆さんが協力してくれたから、コロナ禍でも活動を続けることができたのだと思います。

参加者の皆さんは、ランチの集いにあわせて床屋に行ったり、洋服の準備をしたりして、コロナ禍でもこの居場所を生活のリズムの一つにしてくれました。これからも、みんなで支え合って活動していきたいですね。

スタッフ全員でコロナ禍を 乗り越えた食事会

地域活動者の声

南中野ボランティアコーナー
会長
うきやこ
浮ヶ谷 せつ子さん



※写真は浮ヶ谷さん(右)と庶務の采木美穂子さん(左)

この10年の
あゆみ

② 幅広い層が 担い手になる

だれもが活躍できる 地域を目指して

中野区内でも活動者の高齢化、後継者不足など地域の担い手不足の声が上がっています。中野社協では、地域活動に参加する区民が増えるよう、中野で起きている課題を知り、参加しやすい活動の場をつくる取り組みを行っています。

例えば、ほほえみサービス事業や中野区ファミリー・サポート事業をはじめとする住民相互のたすけあいの仕組みや、ボランティア登録制度など参加のきっかけを提供しています。



ポスターを貼るボランティア「掲示板ウォークラリー」

「できるときにできることを」～ほほえみサービス事業～

区民の参加でつくられる「お互いさま」の地域を目指しているほほえみサービス事業は設立から33年になりました。お互いを思いやり、心のふれあいを大切に取り組んできました。これまで延べ 2,500 名以上の方が協力会員として活動に参加しています。感謝の言葉や、自分の経験や培ってきた力がいかせた充実感など、得難い体験がたくさんあります。また、活動できるときは支援し、大変なときは利用会員として手伝ってもらうことができる「お互いさま」の活動です。



社協での活動をきっかけに、福祉の分野で就職された方もいます

特別なことでなく、自分にできることでこれからも。



ほほえみサービス協力会員
さとう ともよ
佐藤 知世さん

2003年から協力会員として活躍。今年で活動20年目を迎える。

自分が子育てでしんどかったときに、少し話を聞いたり、手助けしてくれる人がいたらと思うことがありました。そんなお母さんの助けになれるかなと思い、説明会を見つけ登録しました。いろいろな利用会員がいましたが、自分のサポートを待っていてくれる方がいると思うと生活に張り合いが出ます。ちょっとした言葉を交わすことで心のふれあいがありますし、活動は楽しいです。「私のおふくろの味は佐藤さん」といわれた時には嬉しくて泣いてしまいました。

何もしないで家にいると気持ちが滅入ることもありますが、社協の活動に参加して「自分にはほほえみの活動がある」と思えます。私は資格も肩書もない主婦ですが、ほほえみの職員がいることで安心して活動できます。特別なことはできませんが、その人の気持ちに寄り添うことならできると思えます。これからも体が動く限り、今までの経験をいかして活動したいです。



多様な参加ができる地域に

地域の施設としてできることを～副施設長 川村さんに聞く～

社会福祉法人ケアネットは、法人として2018年から高齢者困りごとと支援事業の登録サポーターとして登録・活動しています。

活動をしていつも思うのが、ご依頼者は一人でいる時間が長いので、さみしく過ごしている方が多いということです。お宅についてから帰るまでずっとお話をされていて、何をしに行ったのか分からなくなるくらいです。

本当に短時間ですが、その方の話を伺って寄り添える、やりがいがある活動です。

活動によっては、数分で終わってしまう内容も多いので、本当は、ご近所さん同士の助けあいのできればいいのかと感じます。プライバシーや遠慮もあり、立ち話はするのに、いざ困った時には頼みづらいという面もあるのかもしれない。

社協のような公共性の高い団体がこの仕組みを運営することが安心感と頼みやすさにつながっているのだと思います。おたきほうむも高齢者困りごとと支援事業のサポーター活動を通じて、社会福祉施設も、地域の一員として活動を続け、困った時に身近で気軽に相談できる存在になればよいなと感じています。



社会福祉法人ケアネット
特別養護老人ホーム おたきほうむ
かわむら まさひろ
副施設長 川村 将大さん

学生も地域活動に参加中！

中野ボランティアセンターでは、ボランティア活動に関する相談を区民ボランティアの相談員がうかがっています。毎年公募し、学生からシニア世代まで、様々な方が相談員の役割を担っています。相談員を経験した方が地域のコーディネーター役としても活躍しています。

だれもがボランティアができる 地域に感動

中野区報を見て飛び込んだこの活動を通して、これまで大学では関わる機会がなかった年代や立場の方とも関わる機会を持つことができました。また、お金が関係しない、対等なボランティアという「第3の関わり方」を学べたことは良い経験になりました。ボランティアの依頼者が自らも活動をしたいと希望され、支援の輪が広がる様子を肌で感じることでできてうれしかったです。

地域活動者の声

ボランティア相談員
しばた みなぎ
柴田 美風さん



地元の良さを知るきっかけに

ボランティア相談員の活動を通して、地元である中野の住民同士のつながりを見ることができ、中野の良さをたくさん発見しました。

ボランティアの依頼者と活動者、両方のニーズがわかる場面に立ち会えることが一番やりがいを感じる瞬間です。大学の課題をきっかけに始めた活動ですが、福祉を学ぶ学生としても、いち中野区民としても学びになることが多くあります。

地域活動者の声

ボランティア相談員
よしだ すみれ
吉田 堇さん



学びから、ともに活躍する区民へ～地域活動応援！講座～

2016年度から開始した「地域活動担い手養成講座」は、地域活動への参加のきっかけづくりを目的に毎年度開催しています。その時々地域課題や区民の関心の高いテーマを取り上げ、多くの区民が参加しました。活動相談会や講座ではテーマに沿ったボランティア活動を紹介したり、活動体験などを案内して参加に繋げました。

2021年度には、地域共生の理念のもと、地域の誰かが担い手になり、共に地域づくりをすすめる区民の参加を後押ししたいという気持ちを込めて「地域活動応援！講座」と名称を改め実施しています。



ワークショップや実技、当事者の話など、知識だけでなく実際に次の実践につながる講座を企画しています。

コロナ対策から、可能性広がるオンラインへ

コロナ対策として、オンラインツールを活用した講座開催にも取り組みました。

当初はコミュニケーションの取りづらさや操作方法に苦労をした方も多く、操作方法の講習会を実施したり、オンラインサポートのボランティアにも協力してもらい開催しました。現在は、遠方とオンラインでつないで講座を実施したり、外出しにくい方も参加できるなど、オンラインならではの利点もいかされています。



地域活動応援！講座の取り組み（7年間の実績）

＜参加者数＞ 5,884 名
 ＜実施講座数＞ 332 講座
 ＜主な講座内容＞ 認知症を理解しよう、ヤングケアラーを知ろう、子どもの成長と発達 など

成年後見制度に関する講座以外にも積極的に受講していたのですが、訪問診療の先生の話はとても興味深く、さらにいろいろな地域課題について知りたいと興味の幅が広がりました。

現在は、市民後見人としての活動もしています。後見人がついている人やサービスに繋がっている人とお会いして感じるのは、必要な支援につながらず困っている人は中野区内には、たくさんいるのではないかとことです。

活動を通じて地域のいろんな方と出会い、仲間が増えました。自分の経験が役に立つんだという実感ができます。時間がなにかい充実しています。今は、様々な活動への参加を通じて地域の課題を見つけ、自分に何かできるかを考えています。市民後見人やアシストなかの生活支援員活動の経験をいかして、必要な支援につながっていない方の支援や、一人暮らしの将来の不安、日常の書類などの困りごとを市民レベルでより寄り添える支援ができないか、仲間と考えていきたいです。

地域の課題、仲間とともに

地域活動者の声

市民後見人
 やました みちやす
 山下 通泰さん

現在、市民後見人の活動のほか、学習支援やサロンなどで活躍中。



災害時にこそ大切な地域のつながりと区民の参加

中野社協は大規模災害時に区との協定に基づいて災害ボランティアセンターを立ち上げ、災害ボランティアの受け入れの窓口やコーディネート役割を担います。また、災害後の生活支援やコミュニティの再生の役割も期待をされています。

2011年の東日本大震災では、宮城県亘理町、東松島市の支援のために、多くの区民ボランティアの参加と協力のもと、ボランティアバスの運行や、復興サロンの取り組みを行いました。

また、中野区内に避難された方への取り組み「避難者の寄り添い支援事業」では、区民の協力を得ながら、サロン活動を中心に現在も継続して開催しています。避難された方は、中野区にずっと住み続ける方もいれば、故郷に帰りたいと思っている方もいます。様々な思いに耳を傾け、支援を続けていきます。

今後も地域の皆さんや関係団体と協力し、災害時に生きるネットワークづくりを進めていきます。

東日本大震災でつながった被災地・区民ボランティア

東日本大震災の被災地支援のつながりは、宮城県東松島市の仮設住宅で多くのボランティアとともに定期的に開催した復興サロン「なかのカフェ」の活動を通じて絆を深めていきました。

2016年5月には東松島市社協と協定を締結。災害に関する相互交流は中野区の災害ボランティアの取り組みにも役立っています。

また、近年頻発している国内の様々な災害にも中野社協の職員を現地のボランティアセンターへ派遣し、支援活動をしています。これらの経験の中野区の有事の際に役立てていきます。



大規模災害時には、中野四季の森公園に災害ボランティアセンターが設置される予定です。（写真は訓練の様子）

★区民の災害ボランティアへの参加（東日本大震災）★

- ・災害支援ボランティア（亘理町、東松島市 2011年4月～9月）…被災地での支援物資整理、がれき撤去など、延べ232名参加
- ・東松島市仮設住宅でのサロン「なかのカフェ」（2011年～2016年7月）…36回 延べ約300名参加
- ・中野の避難者への取り組み（寄り添い支援事業）…サロン（来らせしらせ、スマイルサロン、さざろくはたけ365、交流サロン等）（2011年～2023年3月） 1,279回 延べ23,520名参加（区民ボランティア、参加者含む）

以前からボランティアに興味があって、退職して時間ができた時、東日本大震災があって、自分でもなにかできることはないかとネットで情報を探し、参加してみました。現地で、若者が泥だらけでボランティア活動をする姿や「ありがとう」の垂れ幕は今でも心に残っています。

その後、中野社協の声掛けで様々な活動に参加しました。私自身は、新しい活動をつくるより割り当てられたことを行う方が得意なので、社協の企画に参加して、楽しみながら社会貢献でき、自分の存在意義を感じました。

現在は週1回のサロン「来らせしらせ」のスタッフをしたり、ほかにも地域でいろんなボランティアに参加しています。「何かしたい」という気持ちを持っている人は多いと思いますが、一歩を踏み出せないのだと思います。なにかきっかけがあれば、自分の世界が広がります。アンテナを張って情報を掴み、自分ができる範囲で参加すればよいと思います。

まず自分にできる一歩を踏み出してみよう

地域活動者の声

避難者の寄り添い支援事業
 「来らせしらせ」スタッフ
 かわかみ しゅんじ ろう
 川上 俊次郎さん

「来らせしらせ」は、鷗宮都営住宅の集会所で毎週金曜日開催。近隣の方も参加し、四季折々のイベントも行っています。



この10年の
あゆみ③ 困った時に助け合える
地域をつくる“ 困った時に助け合える地域づくり
～連携と工夫で孤立を防ぐ～ ”

中野協は、「困った」を言える地域づくりを中心に取り組みを進めてきました。そのために、必要な人に情報を届けて支援につなげ、同じような悩みや課題を抱える人が集まり話ができる場を拓きました。

地域の活動団体も想いは同じく、情報発信や、連携による活動の活性化を目指し、同じ課題に取り組む団体同士が集まりました。それぞれの集まりに私たちも協働し、情報提供や発信に力を入れるために、支援団体を一覧化したマップを作ったり、広報紙を作成したり、さらにはお互いの活動のノウハウを共有して活動を拓げる機会づくりに取り組みました。

この流れはコロナ禍にあっても変わらず、活動団体や当事者団体は、お互いに協力しながらこれまで積み上げてきたつながりを継続するために工夫をし、「いま目の前にいる人たちに何かできないか」という思いから、新たな活動に取り組む団体も増えていきました。

子ども服の配布会
「外国ルーツの子ども
の居場所づくり」の一環
として開催



外国ルーツの子どもの
居場所づくりの活動報告会チラシ
地域に向けて広く理解をいただくために開催



「困りごと」を話しやすい地域の身近な窓口を目指して

「わざわざ窓口に行くのはハードルが高くて相談に行きにくい」という声をきっかけに『なべよこお茶っ相談』が生まれて、今年で5年目を迎えます。社協の地域担当職員と本町地域包括支援センター職員が毎月1回地域に出向き、お茶を飲みながら、おしゃべりや相談もできる場です。

鍋橋区民活動センターで毎週水曜日開催している「なべカフェ」と一緒に開催していることで、来る方にとっても気軽に立ち寄りやすく、これまでも、介護保険制度や認知症の家族のこと、アパート更新時の手続き、住まいのことなど、さまざまな相談がありました。

地域に出向き顔を覚えてもらうことで、困った時にすぐに相談につながるような関係づくりと誰もが気軽に立ち寄り相談できる場として、また、地域の声を受け止め、つなぐ場として、地域の方々や関係機関等と連携しながら取り組んでいます。



なべカフェの一場面

何気ない会話から福祉相談の
身近な窓口となります



「困った」時に地域に寄り添える施設を目指して

中野区内には社会福祉法人が運営する、高齢者施設や障害者施設、保育園等の施設が多くあります。社会福祉法の改正により、福祉の専門家であるこうした施設が、地域の課題に積極的に取り組むことが求められるようになりました。この改正をきっかけに、2019年8月「中野区内社会福祉法人等連絡会（以下連絡会）」が発足し、45の施設（2023.8 現在）が加入しています。

福祉施設が、サービスの利用者だけでなく、地域の相談窓口として「困った時」に頼れる存在を目指し、協働で事業を実施しています。

新 型コロナウイルス感染症の拡大が
きっかけに

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、施設も利用者への感染防止等への対策のため、地域住民との交流を中止し、ボランティアだけでなく家族も面会できなくなりました。施設の状況が一変する中、連絡会の加入施設から「今だからこそ何かできないか」という声があり、コロナ禍をきっかけに顕在化した生活困窮者の支援として、必要な人へ常時食料を渡す取り組みが、まずは2法人でスタートしました。

この取り組みをきっかけに、中野区内の福祉施設が食料の受け取り拠点となり、必要な人へ食料提供を行う連絡会の協働事業プロジェクト「相談支援型フードパントリー」となりました。2023年度は、20施設で行われています。

こ れからも地域の「困りごと」に寄り添い
相談できる施設を目指して

協働事業プロジェクトは始まったばかりですが、「相談支援型フードパントリー」だけでなく、障害や病気、ひきこもりなどにより、すぐに就労につながらない方への「就労体験プロジェクト」など、試行錯誤しながら地域の課題に取り組んでいます。

「困った時に助け合える地域づくり」の一員として、頼もしい専門職の皆さんが協力しています。



クリスマス会
地域の子どもたちの
ためにサンタに
なってお菓子を配布

コロナ禍になり、「職を失い食べるものにも困っている」という声を聞き、何かできないかと考え、「さくらフードパントリー」をスタートしました。

食料を渡す中で最近の様子を聞いたり、どこからか食料の寄附があると必要な方に電話をして声をかけるなど、応援をしてきました。様々な課題を抱えた方が多いので、すぐに相談につながる人は少なく、どちらかというとサービスを受けるのに心理的に抵抗のある人が多くいました。ある相談者から、「声をかけてもらい背中を押してもらったことがきっかけで相談した結果、様々な支援につながった」という言葉を頂いたときは、人の心に寄り添い、ゆるやかな関係性を続けることが大切だと改めて感じました。

この活動をきっかけに、子育て世帯や若者を支援する団体とも知り合い、横のつながりが広がってきました。これからもあきらめず、地域の様々な団体と協力して取り組んでいきたいと思っています。

一人ひとりに寄り添う
支援を心がけて

地域活動者の声

社会福祉法人武蔵野療園
しらさぎ桜苑 地域連携室長
しろいあ ゆうこ
白岩 裕子さん



子どもたちの今を支えて豊かな未来へ ～ひろがる地域の取り組み～

ネットワークの創設

『子どもの貧困』が社会問題として取り上げられる中で、中野区内でも、この課題に取り組むため、多くの子ども食堂や学習支援活動が立ち上がりました。

2016年に、区内の子ども食堂のリーダーから、「団体間のネットワークを作りたい」という声が上がりました。中野社協も呼びかけに協力し、当時区内で活動していた子ども食堂9団体、学習支援活動8団体の計17団体が集まり、情報交換会を開催しました。最初はお互いの存在や活動内容を知らなかったそれぞれの団体が、共通の課題や状況を話し合う中で親睦を深め、2017年2月に、中野区内で子どもの貧困課題に取り組む団体のネットワーク『こどもほっとネット in なかの』が発足しました。

参加団体から手を挙げたメンバー3名と中野ボランティアセンターが事務局を担い、団体同士がゆるやかにつながるネットワークとして定期的な情報交換会、『中野区の子ども食堂・学習支援活動マップ』の発行により、区内の食・学習を通じて子どもたちの居場所をつくる活動の周知・広報活動を続けています。



「こどもほっとネット in なかの」情報交換会



中野区の子ども食堂・学習支援活動マップ

私が「こどもほっとネット in なかの」の立ち上げに声を上げた当時、中野区内には、まだ活動団体数も少なく、それぞれが手探りで取り組んでいました。みんな不安もあったと思います。

当初は、参加団体みんなで、貧困をはじめ子どもたちを取り巻く社会課題の解決に向けて取り組めたらという気持ちもありましたが、みんなそれぞれの活動や仕事に忙しく、また、取り組んでいる地域課題もさまざま。そこで、「こどもほっとネット in なかの」では、みんなで結束するのではなく、中野の子どもたちのために食や学習・居場所をテーマに活動する団体がゆるやかにつながって、ネットワークが参加団体にとって運営の安心感になったり、何かあれば連絡を取り合える仲間づくりのきっかけを提供する役割になれたらと考えています。

年2～3回開催している情報交換会では、毎回テーマを決めて情報交換をしています。参加団体も増え、この集まりの中で、話されていない団体もあるように感じます。ネットワークの事務局として、これからは、エリアごとの情報交換など、より身近な規模で連携を深められる機会をつくり、活動団体の助け合いの橋渡しができればいいなと思っています。

ネットワークの立ち上げとこれから

地域活動者の声

こどもほっとネット in なかの
事務局メンバー
NPO 法人ここからプロジェクト
いとう よしひろ
伊藤 由宏さん



これから解決すべき課題

2020年からの新型コロナウイルス感染症の拡大により、多くの子育て世帯も経済的な影響を受けました。中野区内でも、食の支援を中心に子どもたちを支える取り組みへの関心が高まり、ボランティアグループだけでなく、飲食店や教会なども子ども食堂や子育て世帯向けの食料配布の活動をはじめました。『こどもほっとネット in なかの』への参加も増え、マップの掲載団体は2018年度の13団体から、2023年度には41団体に増えました。団体同士のつながりも生まれています。

一方、地域の活動から、子どもたちを取り巻く課題は、貧困だけではなく、家庭環境や発達など様々な要因が重なり合っていることが見えてきています。発達障害やヤングケアラーなどの課題に取り組む活動が中野区内でも拡がり始めています。



子どもの居場所ゼミ

中野社協では、どのような状況の子どもたちでも安心して過ごせる居場所づくりの普及啓発のため、2022年度に『子どもの居場所ゼミ』を開催しました。

知人宅で小学生のお子さんの家庭教師をした経験がきっかけで、様々な理由で中学入学時点で小学校の学習の土台ができていない子たちが高校受験で困らないよう、中学3年間のサポートをしたいと考え、「中野よもぎ塾」をはじめました。

よもぎ塾の子どもたちを見ていると、同年代の子どもたちに比べ経験が少ない子が多いです。よもぎ塾では、子どもたちを美術館に連れて行くこともあります。また、「みんなにキャンプの体験を」とあたたかいご寄附をいただき、夏休みにみんなでキャンプに行きました。お金の使い方、準備、炊事など、子どもたち主体で考え、動くことで、帰ってきてからの子どもたちのチームワークが変わり、学習面でもプラスになりました。

コロナ禍の間、オンライン授業をした時にすごくわかったのが、デジタル格差、家庭環境の格差がすごく大きいこと。か細い回線で全然つながらない子がいたり、小さい子を見ながらちゅぶ台に向かってる様子が画面越しに見えたり。自宅学習が難しい子どもたちの環境が垣間見えました。

よもぎ塾は定員25名。規模を大きくする気は全くありません。やりたいた人の背中を押して、無料塾を増やすことに貢献し、無料塾が必要な子どもがより多くつながったらいいなと思います。不登校などをテーマに特化した無料塾も出てきています。いろんなタイプと雰囲気のある場所があった方が面白いし、子どもたちにとっても利益があると思っています。

無料塾の取り組みから見たこと

地域活動者の声

中野よもぎ塾代表
おおにし ももこ
大西 桃子さん



コロナ禍だからこそつないだ支援と取り組み

新型コロナウイルス感染症の影響は、障害者・当事者団体の活動にも大きな影響を与えました。例えば、余暇活動、健康維持の活動を行うために、会場として使用していた福祉施設が貸出禁止になったことで、活動ができないという事態になりました。また飲食や接触を伴う活動も感染拡大防止のため控えた結果、会員の孤立が深刻化しました。しかし、中野社協は、それでも歩みを止めず、「できること」を、団体と共に考え、コロナ禍でもつながり続けることを目指しました。



コロナ禍においてのつながりの一工夫

開催できない居場所では、手書きの手紙も有効手段になりました

④ 団体の声をヒントに応援！

地域で活動していた団体から「コロナ禍で事業が実施できない、他の団体はどうしているのか」という相談が、寄せられました。そこで活動状況を把握するためのアンケートを実施したところ、多くの事業が中止となる一方で、電話や手紙、オンラインなど、様々な方法でつながりを保つための活動が行われていることが分かりました。その後、各団体の活動状況を共有、こうした活動を応援するために助成金の運用を変更しました。また、人が集まる活動の実施が難しいと判断して、申請が無かった団体には、職員が丁寧に寄り添ってコロナ禍の活動を一緒に考え、助成金を有効に活用してもらえよう2次申請を受け付けるなど、コロナ禍の活動に柔軟に対応できるように取り組んできました。

④ 困った！をチャンスに！

助成金では、電話や手紙といった非対面の交流活動経費の助成を新たに行いましたが、オンライン（Zoom）、LINE、スマートフォンといったICTを活用した新たな「つながりづくり」も急速に進みました。しかし、ICTにすぐになじめない団体が多いのも実情でした。このような団体に対し、ICT支援に関心が高いボランティアと、地域の人と人、団体を積極的につなぐ支援を行いました。普段の団体活動だけでは、関わる人が無いたと人がつながることで、オンラインの講座、講演会、リトミック等といった余暇活動をはじめ、SNSでも会員同士のつながりが広がっていききました。



オンライン講演会

私たちは2019年に団体の活動をスタートさせました。社協の支援もあり、翌年の2020年には、会員をはじめとする当事者や家族の交流、親睦を深める事業を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの流行によりできませんでした。やむを得ず、オンラインでの定例会、オンラインと会場のハイブリッドでの勉強会や講演会となりました。会員だけでなく上手に対応できないこともありましたが、社協の助成金や職員さん、ボランティア相談を活用し、オンライン操作に詳しいボランティアの方の紹介をいただいたことでスムーズな運営ができるようになりました。オンラインを使うことで、会員のみなならず、日頃、外へ出ることが難しい障害のある方とその家族が、気軽に参加できるようになったことは良いことだと思います。

つながりを支えたボランティア

地域活動者の声

中野区重症心身障害児（者）を守る会
会長

うの まさこ
宇野 雅子さん



国籍・言葉・文化の違いを超えて支え合える地域を目指して ～鷺宮西住宅での取り組みから～

区内の外国人世帯数の増加に伴い、町会・自治会から、地域の助け合いに、外国ルーツの住民とうまく関係が築けず悩んでいるとの相談を受けるようになりました。また、外国ルーツの子どもに対する学習支援ボランティアの活動から、日本語の理解が困難で生活に必要な情報を得られず困っている世帯の様子が見えてきました。

そこで、中野社協では、多くの外国ルーツの住民が暮らしている地域の鷺宮西住宅自治会と連携し、この地域で国籍を問わず参加できて、困りごとの相談もできるサロンの立ち上げを目指しました。そして、中野区国際交流協会、NPO 法人 HATI JAPAN 多文化多言語の子ども発達支援の協力を得て、地域活動応援！講座『外国ルーツの子どもの居場所をつくろう ～やさしい日本語でつながる NAKANO～』を開催しました。



講座受講後の話し合い

④ 地域と立ち上げた居場所

講座開催後、関係者や地域の講座受講者とともに地域でできることについて話し合いを重ねました。

その結果、鷺宮西住宅コミュニティホールを会場に、2022年4月より中野区国際交流協会による『さぎのみや日本語教室』、NPO 法人 HATI JAPAN 多文化多言語の子ども発達支援による『げつよう②・④ひろば』が立ち上がりました。

初年度はそれぞれの活動に延べ300名を超える参加者があり、地域と外国ルーツの子どもたち・親子のつながりが深まっています。

④ 拡がる活動のネットワーク

居場所づくりと並行して、活動団体から、日常的な情報共有と活動者同士の横のつながりを作りたいと声が上がリ、中野区国際交流協会、NPO 法人 HATI JAPAN 多文化多言語の子ども発達支援、中野社協による『鷺宮グローバルネットワーク』が発足しました。学校や警察などとも連携が広がっています。



げつよう②・④ひろば



さぎのみや日本語教室

私は、鷺宮西住宅を担当している民生児童委員です。

鷺宮西住宅は、高齢化が進みつつ、外国ルーツの住民が増えてきた団地です。防災の面からも、外国ルーツの住民とも協力していかなければならないものの、言葉や生活習慣の違いから、なかなかつながりが持てずにいました。どうしたらよいか悩んでいたとき、中野社協から、『やさしい日本語』をテーマに鷺宮西住宅で講座を開きたいと相談があり、一緒に取り組みました。講座の運営を通して、『やさしい日本語』を学んだことで、言葉の壁という自分で作った垣根がとれました。

講座と、その後の居場所づくりに参加して感じていることは、国が違っても人と人とのつながりは顔の見える関係づくりが大切ということ。居場所の参加者も増えてきて、来ている外国ルーツの方の積極性も見られるようになり、地域で協力し合える関係に向けてゆっくりと進んでいます。

国籍を超えて地域で協力し合うために

地域活動者の声

民生児童委員
はまだ かつえ
濱田 勝江さん



この10年の
あゆみ

④

解決しにくい課題に

みんなで取り組む

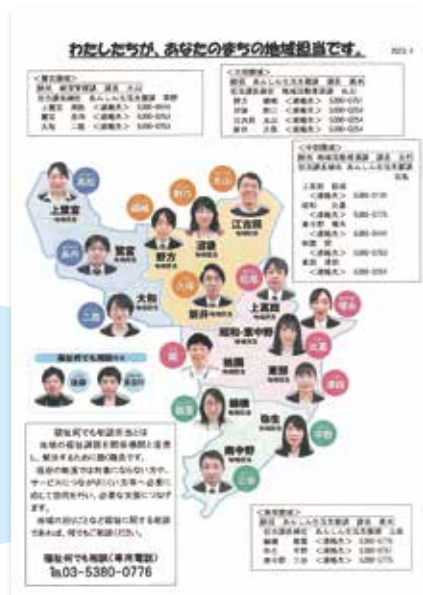
身近な地域課題に
みんなで取り組む

この10年で、ライフスタイルの多様化や人口減少・少子高齢化、新型コロナウイルス感染症などの影響により、地域社会を取り巻く環境も大きく変化してきています。それに伴い、「8050問題」「新型コロナウイルス感染症の影響による生活困窮」等、地域課題も多様化してきており、既存の行政サービスや福祉サービスだけでは対応できない相談が増えています。

中野社協では、そうした既存の制度の狭間にある課題や解決しにくい課題に対して、「福祉何でも相談」「ひきこもり支援」「中野つながるフードパントリー」等、新たな相談窓口の設置や社会資源の創出に取り組んできました。

また、各区民活動センター単位に地域担当職員を配置し、町会・自治会、民生児童委員をはじめとする地域のみなさん、関係機関と連携し、身近な福祉課題をともに考え、解決に向けて取り組んできました。

地域担当職員が
ひと目でわかるチラシを作成



私たちの思い



福祉何でも相談 担当
ごとう まさき
後藤 将来

入職14年目。
2015年度より福祉何でも相談を
担当。

2015年度に福祉何でも相談の窓口を開設してから、「何でも」という言葉に引き寄せられるように、困りごとを抱えている本人だけではなく、地域住民や民生児童委員、関係機関などから、地域で気になる方や心配な方がいると相談をいただくことも増えました。その中には、既に様々な窓口で相談したにも関わらず、解決に至らないため、福祉何でも相談に辿り着いたという方もいます。

また、中野区の特徴とも言えますが遠方で暮らす家族から、「中野区で一人暮らしをしている家族と連絡が取れない」「体調が悪そうで心配。様子を見に行ってほしい」などと連絡をいただくこともあります。まずは様子を確認するため、突撃訪問をしますが、本人と会えないことがほとんどです。その度に関係を築くことの困難さを感じています。何か本人へのアプローチのきっかけを掴みたいと、本人が暮らしているマンションやアパートの全戸にチラシのポスティングをし、チラシを見て連絡が来るかもと待っていますが、それでも会えないケースが多くあります。そのため、相談から解決には長い時間がかかり、結果として解決に至らずに関わり続けている相談もあります。そのような時には、ご本人と一緒にトコトン考えたり、思いをともにしたり、つながり続けるようにしています。

社協だけでは解決することができないことも多いですが、関係機関や地域住民の協力・理解を得ながら困りごとの解決に向けて取り組んでいます。

福祉何でも相談～一人ひとりに寄り添う支援～

「社会的孤立を生まない、人と人がつながる地域づくり」を目指し、2015年度に中野社協独自の相談窓口「福祉何でも相談」を開始しました。

「福祉何でも相談」は、既存の制度や仕組みでは解決が難しい相談に対し、当事者の理解を得ながらアウトリーチを行い、民生児童委員をはじめ町会・自治会、区内の関係団体等と連携し解決に向けて取り組んでいます。また、様々な相談を通じて、地域の福祉課題を解決するよう、居場所やネットワークなどの新しい社会資源の開発に取り組んでいます。



福祉何でも相談担当 長谷川
「地域で見かけたら気軽に声をかけてください」

福祉何でも相談ができたきっかけ

中野社協では、2004年度から地域担当制を開始し、地域における居場所づくりや、様々な地域活動の支援を行なってきましたが、取り組みの中で課題とされたのは、行政や介護保険等、既存のサービスの対象にならない「制度の狭間にある人」たちの存在でした。

そこで、2015年度から、「福祉何でも相談」の窓口を開設しました。「何でも」とネーミングしたのは、「困りごと」のハードルを下げ、直接の相談を寄せていただきたい、日頃気になっている世帯や人の情報を寄せていただきたいという意味が込められています。

「福祉何でも相談」は生活の困りごとの気軽な相談窓口として、「こんなこと相談していいかしら」ということでも何でも相談できる窓口です。どこに相談したらよいかわからない場合でも、そのご相談を受け止めます。課題の解決のため、信頼関係を構築しながら伴走型の支援を行っています。



同居の両親を相次ぎ亡くし、転居が必要なのにエネルギーがわず、行動を起こせませんでした。家に社協の何かの紙があり、相談しようと決心していましたが、実際電話するまで2か月かかりました。わらにもすかぬ思いで社協に電話すると「来週行く」と言ってくれました。まるで海の中に投げ込まれた浮き輪のようで、これをつかまなければと思いました。

職員が来てくれて、本当にホッと、説明しているうちに涙が出ました。家中荷物がいっぱい、押し入れも開かない、処理するものも山積みでした。

その後、職員の定期的な訪問があり、片付けのためにボランティアさんにつないでくれたりしました。さらに、転居の時には民生児童委員や、地域のボランティアグループの人たちなど、たくさんの人に手伝ってもらいました。転居後も引き続き、色々な地域の居場所に参加できるように職員が付き添ってくれました。

社協には、本当によくしてもらいました。自分がよくしてもらった分、お返しをしたいと思っています。ささやかながら私ができることがあれば。

やっとの思いで相談した人をきちんと受け止めて、一緒に歩んでくれるのが社協です。うまく話せなくてもいいので、とりあえず社協に連絡してみてもどうでしょう。相談できるって、とっても心強いですよ。

一緒に歩んでくれる
のが社協です

相談者の声
ひろこさん



住民とともに考え、はじめた取り組み ～「ひきこもり支援」～

福祉何でも相談の取り組みを通じて、社会的なつながりがなく、長期間にわたりひきこもり状態にあり、困りごとを抱えていながらも誰にもSOSを出すことができない状況にある方が多くいることが見えてきました。

ひきこもり当事者・家族のための居場所「カタルーベの会」

2015年11月に開催した第2回なかの地域福祉フォーラムで「中高年のひきこもりを考える」をテーマに分科会を設け、ひきこもり状態の方に対する理解を深め、地域住民としてどのようなことができるのかを参加者と一緒に考えました。このフォーラムをきっかけに、地域で様々な活動をしている方々を中心に、ひきこもり状態にある方の家族などと話を進め、2017年にひきこもり当事者・家族のための居場所「カタルーベの会」が立ち上がりました。



なかの地域福祉推進フォーラムでは、家族会の活動者、他区で居場所活動に取り組んでいる実践者などの報告もありました

もともと仕事で精神障害の方のサポートをしていましたが、会えるかどうか分からないひきこもりの方へはどう支援すればいいのかな、とはずっと思っていました。地域福祉推進フォーラムに参加し実際に活動している方のお話を伺った際に、ひきこもり状態から動けるようになった時に安心して通える居場所があることの大切さを感じました。しかし中野区にはなかったの、できたらいいですねと話したのが、活動を始めたきっかけです。

今後、月1回から頻度を上げて週に2、3回開催できるようにすれば、「今日は頑張れないけどあさって調子が良ければ行こうかな」と気が楽になって参加しやすくなる方がいるのではないかと思います。また映画会や音楽会を開催することができたので、参加者の方がやりたいことを企画して実現していくことができる会になるといいと思っています。

「できたらいいね」から実現した安心できる居場所

地域活動者の声

左：カタルーベの会
代表

なかがわ や お こ
中川 弥生子さん

右：スタッフ voice



※写真 左下：中川さん（代表）
左上：安達さん（スタッフ）
右上：鈴木さん（スタッフ）
右下：羽尾さん（スタッフ）

- カタルーベの会で出会った方のお話は、毎回教えられることはかりでした。安心してまた来ることができる居場所を皆さんと作るためには気配りも大切、年の功で頑張ります。（羽尾）
- カタルーベの会に参加して、気が付いたら自分の居場所になっていけたと思います。ここに参加するから出会える人もいると感ずます。身の丈に合った活動しかできないですが、これからも関わり続けていきたいと思っています。（鈴木）
- 「一度参加してみるか」と思って参加したところ、自分自身の居心地がよく感じたことでスタッフとして活動することを決めました。ひきこもりになる可能性は誰にでもあることだと思います。支援者、当事者など分けることない居場所になれおと思っています。（安達）

安心・安全な居場所づくり ～一人ひとりにあった居場所の立ち上げ～

カタルーベの会をきっかけに、新しく様々な居場所が立ち上がりました。ひきこもり状態にある方や生きづらさを抱えた方、それぞれの思いや状況にあった取り組みを、家族や住民の理解者と一緒に進めています。

家族同士が語り合える居場所「中野わの会」

カタルーベの会のスタッフだった方を中心に、ひきこもり状態にある方の家族が、家族同士でつながることができる居場所をつくりたいとの思いから、2018年に立ち上げました。

家族会では、家族懇談を中心に、講師やカウンセラーを迎えての勉強会、講演会などを開催しています。

家族だけで抱え込まないよう思いを共有し、同じ境遇の家族同士でつながりを持ちながら、一歩ずつ前に進むことを目指しています。



「中野わの会」の勉強会

自分に合った参加ができる居場所「大和すたんぷクラブ」

一人の相談者の声がきっかけとなり、生きづらさを抱えている方も気軽に参加できる新しい居場所を、地域の協力者と一緒に立ち上げました。使用済み切手を整理する活動で、無理して話す必要がなく、一人で黙々とできる作業でありながら、他の参加者とのつながりを感じられるため、多くの方の参加につながっています。切手整理の後は、ポッチャをして体を動かすことが定番です。

整理された切手は換金し、ボランティア基金に積み立てています。同様の活動は各地区にも広がっており、現在7か所で実施しています。



「大和すたんぷクラブ」の活動

ひきこもり支援事業 相談窓口

2022年4月より、ひきこもり相談の窓口を設置しました（中野区より受託）。

家族からの相談を中心に、ひきこもり状態にある本人、ひきこもりのことを心配している近隣住民など、様々な方から相談が寄せられています。相談は、電話、メール、対面で受けています。本人や家族の話をもとに、今後について一緒に考えていきます。

相談の他、本人や家族、地域の方と一緒に一人ひとりにあった居場所づくりにも取り組んでいます。



コロナ禍で生まれ た新しい取り組み

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症は、感染拡大により私たちの社会活動が様々な制限を受けることで、生活困窮者の増大や地域におけるつながりの希薄化など深刻な生活課題を顕在化させました。

特に生活困窮については、社協が実施していた新型コロナウイルス感染症の影響による特例貸付（2020年3月～2022年9月実施）の実績が東京都では約66万件にものぼり、2008年のリーマンショック時の約33倍となっています。

中野社協では、コロナ禍で見えてきた地域の課題を発信し、一人ひとりができることを考え、地域で困っている人を地域で応援する地域づくりを住民とともに進めてきました。



中野にフードパントリーをつくらうプロジェクト
@ 若宮児童館（2021年3月実施）

7 ファンドレイジング企画に挑戦！

「子どもの貧困」や「コロナ禍による生活困窮」などの課題が顕在化していく中で、中野社協では住民が中野における地域課題を知り、寄附を通じてその課題解決の一助を担うことができる参加の機会をつくることを目的に、ファンドレイジング企画にも挑戦し、予想を超える多くの住民の方々からの温かい気持ちを寄せていただくことができました。

①中野の子どもに辞書を贈ろうプロジェクト

目標金額：300,000円 寄附総額：538,734円
寄附件数：97人・団体 贈呈辞書数：156件

②中野にフードパントリーをつくらうプロジェクト

目標金額：300,000円 寄附総額：777,651円
寄附件数：93人・団体 食品提供世帯数：201件

③中野つながるフードパントリープロジェクト

目標金額：600,000円 寄附総額：2,418,356円 寄附件数：120人・団体
パントリー実施回数：8回 食品提供世帯数：790世帯

ファンドレイジングとは？

直訳すると資金調達を意味しますが、単にお金を集めるということではなく、それを通じて社会的な課題を人々に発信し、理解してもらい、その解決への参加者を増やして、社会をよりよくしていくための手段です。



ご協力ありがとうございました

自主財源を確保する ファンドレイジングの意義

法政大学教授
いきいきプラン推進委員会
委員長
みやしろ たかし
宮城 孝さん



既存の制度や事業の枠内で対応できない地域の課題が増えてきています。コロナ禍では、中野社協の窓口には、膨大な特例貸付の相談や申し込みが殺到しました。このことは、コロナの影響で生活が困窮状態に陥った多くの住民がいることを意味しています。根本的な解決にはいたらないかもしれませんが、このような深刻な生活上のニーズや課題に対応するために、社協には柔軟で効果的な取り組みが求められます。このような社協として独自の対応を可能にするために、行政の委託や補助金に依存しない自主財源を確保することが益々重要になってきます。今回のコロナ禍において、地域の町会・自治会が寄附の募集に協力をして実施したパントリーは、地域で生活に困窮している住民への区民の共感を広げた取り組みとして、高く評価したいと思います。

「中野社協であれば何とかしてくれる。」このような中野社協のファンづくりこそ、自主財源のさらなる確保につながるファンドレイジングがめざすべき方向であり、今後さらにブラッシュアップされることを期待します。

中野つながるフードパントリー

ファンドレイジング企画で集めた募金を原資に、区内の各地区で「中野つながるフードパントリー」を実施し、コロナ禍で生活に困窮する世帯への食料支援等を通して、地域で困っている人を地域で応援する地域づくりを住民や民生児童委員・町会自治会・福祉施設等の関係機関とともに進めてきました。これまで、15回実施、延べ1,493世帯に食品を提供することができました。



中野つながる
フードパントリー
@ 江古田
(2023年1月実施)



中野つながるフードパントリー @ 沼袋
(2022年3月実施)

広がるつながりの輪

中野社協が取り組んできたフードパントリーの輪が、新たな住民主体の活動として各地区に広がっています。

東部地区では、2021年度から「東部町会は子育て世帯を応援しています」を合言葉に、14町会が中心となって実行委員会を立ち上げ、「東部町会フードパントリー」を実施しています。この取り組みは今も地域のために継続して行われています。



フードパントリーの取り組みが
区内に広がってきています。



「東部町会フードパントリー」は、コロナ禍で見えた中野区の生活困窮者に関する報告を中野社協が主催する「いきいきプラン推進委員会」で知ったことがきっかけで始まりました。その中では、30-40代を中心に、貧困状態にあると報告されていました。働き盛りのパパママ世代がまさか...と愕然としたのをよく覚えています。

「私たちの住む地域にも、見えにくいけれど色々な事情を抱えた方がいるのかも知れない」と思ったら、居ても立っても居られず、すぐに、14町会一丸となって準備を始めました。

なんとか第1回目のフードパントリーを終えた後、「生活にお困りの方へ」という声かけの仕方では、手が届きにくいことに気づきました。そこで、「東部町会は子育て世帯を応援しています」を合言葉に、どなたでも参加できる形を目指して、第2・第3回のフードパントリーを実施しました。東部のこたわりは、「準備する側も楽しく」です。受け取った人が笑顔になれることを考えながら、1つ1つ真心を込める。プレずに居られるのは、この気持ちを地域の想いとして、共有しているからだと思います。

私たち東部町会は、これからも「住み続けたい、住んでいて良かったと思えるまちづくり」を目指していきます。



住んでいて良かったと思える まちづくり

地域活動者の声

東部町会フードパントリー
実行委員会
事務局長
むらかみ まさこ
村上 昌子さん



中野社協の
あゆみ中野社協
年譜
since19531953～2012年
創立から

- 1953 中野区社会福祉協議会創立
昭和28年 初代会長に矢島尚吉氏就任、事務所を
中野福祉事務所内（野方2丁目）に置く
- 1955 第1回歳末たすけあい運動実施
昭和30年
- 1962 社会福祉法人認可
昭和37年
- 1965 社協事務局 中野区役所内
昭和40年 （当時中野2丁目）に移転
- 1968 事務局を区新庁舎（現庁舎）に移転
昭和43年
- 1984 中野ボランティアセンター開設
昭和59年 （現スマイルなかの敷地内）
- 1990 ほほえみサービスセンター事業開始
平成 2年
- 1991 東中野高齢者在宅サービスセンター
平成 3年 を区より受託
- 1992 南中野高齢者在宅サービスセンター
平成 4年 を区より受託
- 1994 第1次中野区民地域福祉活動計画
平成 6年 「いきいき中野21」策定
- 1995 事務局 スマイルなかのへ移転
平成 7年
- 1999 ファミリー・サポート事業を中野区より
平成11年 受託、地域福祉権利擁護事業を東京
都社会福祉協議会より受託
- 2002 初のまちなかサロン「アイアイ北野」
平成14年 開催
- 2003 創立50周年記念式典の開催、記念誌
平成15年 の発行
- 2004 第2次中野区民地域福祉活動計画
平成16年 「いきいきプラン」の策定
・東中野高齢者在宅サービスセンター
受託運営を民間介護事業者へ引き継ぎ

- ・アシストなかの（権利擁護センター）開設
- ・区内14地区ごとに地区担当職員を配置する
「地域担当制」を開始
- ・今後の運営・経営方針として「活動と経営の理念」を
制定
- 2005 「会員会費制度等検討会議」を設置、会員規程改正
平成17年
- ・妙正寺川の集中豪雨災害に災害ボランティアを募集、派遣
- 2006 南中野高齢者在宅サービスセンターの受託運営を民間介
平成18年 護事業者へ引き継ぎ
- ・当会の愛称「ハピネスなかの」とシンボルマークを決定
- 2007 指定事務受託法人として都より指定を受け、介護保険認
平成19年 定調査センター立ち上げ
- 2008 中野区成年後見支援センターを中野区より受託
平成20年
- 2009 高齢者困りごと支援事業を開始
平成21年
- ・第2次中野区民地域福祉活動計画
第2期実施計画（平成21～25年度）開始

- 2010 10代目会長窪寺登氏退任
平成22年
- 11代目会長に吉成武男氏就任
- 2011 犯罪被害者等緊急生活サポート事業を中野区より
平成23年 受託
- ・東日本大震災被災地への支援
宮城県亘理町災害ボランティアセンターへ職員
及びボランティア派遣
- 宮城県東松島市へ災害ボランティアの派遣
（亘理町、東松島市あわせて述べ232名が活動）
- ・避難者の孤立化防止事業（区内避難者への支援）
開始（現在も継続中）
- 避難者との交流サロン「来らっせしらすざ」を開催
- ・宮城県東松島市の仮設住宅でお茶会
「なかのカフェ」を開催（～2016年7月まで実施）
- 2012 まちなかサロンが区内20ヶ所に広がる
平成24年

2013～2022年 現在まで

- 2013 「創立60周年記念事業」実施
平成25年 地域愛テーマソング「ほほえみの花」作成
- 2014 「第3次中野区民地域福祉活動計画」いきいきプラン策定
平成26年 ・第1回なかの地域福祉推進フォーラム
パネルディスカッション「皆さんに知ってほしい 私たちの活動
と地域への第一歩」
- 2015 第2回なかの地域福祉推進フォーラム「社会的な孤立を生まない、
平成27年 人と人がつながる地域づくり」をテーマに「中高年のひきこもり」
「障害者理解」について
「あんしんサポート事業」開始
・制度のはざまにある課題をもつ区民の様々な相談を受け止める
「福祉何でも相談」開始
・まちなかサロン以外の「居場所活動」を情報収集
「地域の居場所情報一覧」発行
・中野区小学生学習支援事業「しいの木塾」区より委託
・「受験生チャレンジ貸付支援事業」区より受託
・台風・豪雨（強風）災害被災地への支援
茨城県常総市災害ボランティアセンターへ職員派遣
- 2016 宮城県東松島市社会福祉協議会と
平成28年 「災害時における相互支援活動に関する協定」締結
・「地域活動担い手養成講座」（現「地域活動応援！講座」）開始
・第3回なかの地域福祉推進フォーラム
「あなたの気持ちが出発点 動けば地域が好きになる」
・区内社会福祉法人の社会貢献の取組み
「社会資源情報カード一覧」の作成
- 2017 第4回なかの地域福祉推進フォーラム
平成29年 「困った時に支えあえる地域を作る」

詳しくはこちらから



スマイル福祉まつりでほほえみの花合唱

あんしん
サポート事業

訪問し、心配ごとを伺いながら必要なサービスを検討します。

一人暮らしや身寄りのない高齢の方々の、これからを支えるサービスです。日常的な見守りから入院時の対応、亡くなった後の手続きなど、老後の不安を「あんしん」に変えるしくみです。月2回のあんしん電話、3か月毎の定期訪問でゆるやかな見守りを行います。

詳しくは
こちらから

- ・ひきこもり当事者や家族を対象にした居場所
「カタルーベの会」立上げ

- 2018 第5回なかの地域福祉推進フォーラム
平成30年 「住民が主役の地域づくり～これからの5年間を見据えて～」
・台風・豪雨（強風）災害被災地への支援
広島県呉市災害ボランティアセンターへ職員派遣

- 2019 第3次中野区民地域福祉活動計画
平成31年 令和 元年 第2期実施計画（2019～2023年度）策定
・社会福祉法人の地域公益活動の推進を目的とした
「中野区内社会福祉法人等連絡会」発足
・初めてファンドレイジングの企画を実施
「中野の子どもに辞書を贈ろうプロジェクト」
・台風・豪雨（強風）災害被災地への支援
千葉県鋸南町災害ボランティアセンターへ職員派遣

- 2020 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた世帯の支援
令和 2年 「生活福祉資金特例貸付」の開始（2022年9月まで）
・ファンドレイジング企画第2弾
「中野にフードパントリーをつくらうプロジェクト2020」
・「中野・子どもの未来応援基金」の設置

- 2021 第3弾
令和 3年 「中野つながるフードパントリープロジェクト2021」
「中野つながるフードパントリー」を各地区に呼び掛けて
実施（2022年度も継続して実施）

- 2022 「ひきこもり支援事業」を中野区より受託
令和 4年 中野区が成年後見制度利用促進計画を策定、中核機関として
成年後見支援センターの機能を強化
・台風・豪雨（強風）災害被災地への支援
静岡県清水市災害ボランティアセンターへ職員派遣



第5回なかの地域福祉推進フォーラム

中野区
成年後見支援センター

成年後見制度とは、認知症や障害などで判断能力が不十分な方の財産や権利を守るための制度です。中野区成年後見支援センターでは、判断能力が低下しても住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、成年後見制度の活用をお手伝いしています。

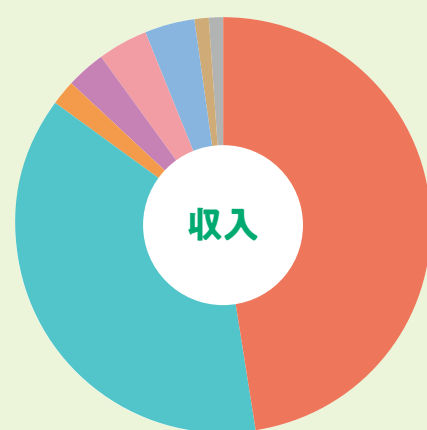
詳しくは
こちらから

データブック

データで
見る
中野社協

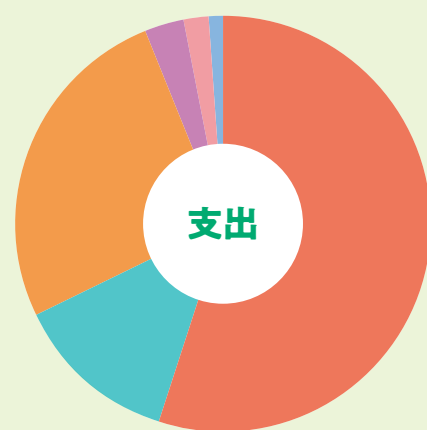
財政編

1. 2022 (令和 4) 年度決算状況



494,020,622 円

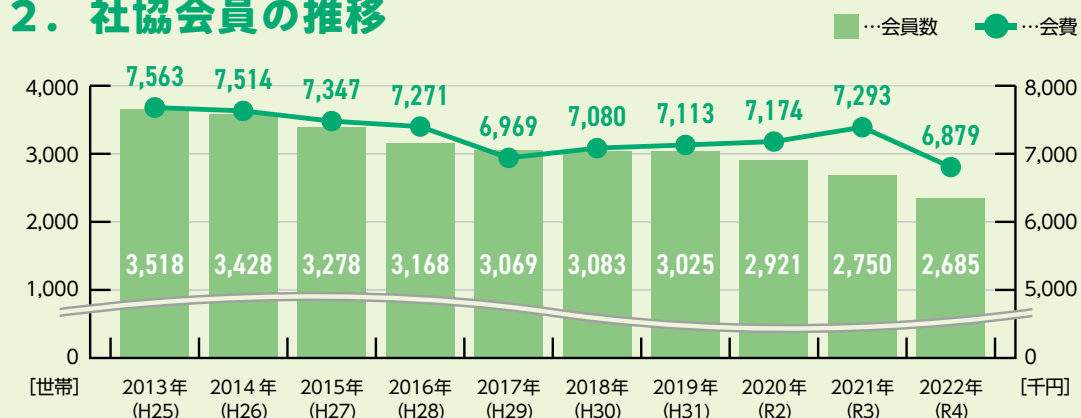
● 受託金収入	235,819,163 円
● 補助金収入	188,128,924 円
● 会費収入	9,346,500 円
● 寄附金収入	15,465,172 円
● 事業収入	19,225,958 円
● 積立資産取崩収入	19,043,102 円
● その他の収入	4,342,988 円
● 前期末繰越金	2,648,815 円



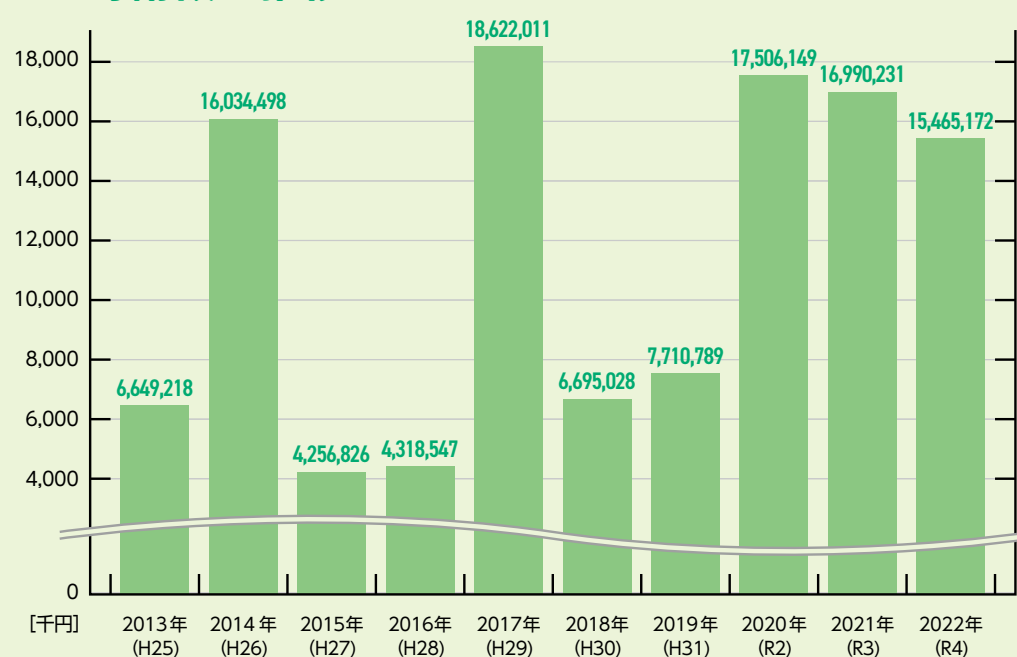
494,020,622 円

● 人件費	269,990,720 円
● 事業費	65,917,382 円
● 事務費	126,609,065 円
● 助成金支出	16,521,076 円
● 積立資産支出	12,270,019 円
● その他の支出	2,712,360 円

2. 社協会員の推移

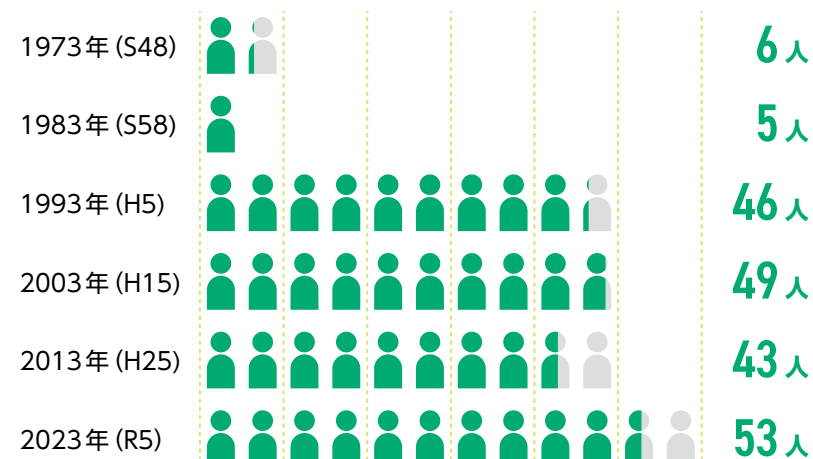


3. 寄附額の推移



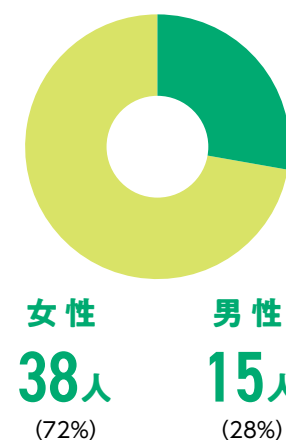
1. 職員の数 (常勤、非常勤のみ。わかる年は4月時点)

● 5人



職員編

2. 職員の男女比 (2023.9月現在)



3. 職員の平均年齢 (2023.9月現在、常勤職員のみ)

39.9 歳

4. 職員の社会福祉関係の資格取得 (2023.9月現在)

● 社会福祉士	36人	● 介護支援専門員	12人
● 精神保健福祉士	10人	● 看護師	1人
● 介護福祉士	12人	● 保育士	4人

名簿一覧

(令和5年10月現在)

理事

会長	吉成 武男	中野区社会福祉協議会
副会長	大野 道高	中野区町会連合会
副会長	大浦 厚子	中野区民生児童委員協議会
常務理事	奈良 浩二	中野区社会福祉協議会
理事	鳥井 文哉	中野区健康福祉部
理事	河合 りな	中野区議会
理事	脇屋美智子	中野区民生児童委員協議会
理事	駒野登志夫	社会福祉法人 武蔵野療園
理事	戸辺 眞	公益社団法人 中野区シルバー人材センター
理事	櫻井 英一	中野区医師会
理事	山崎由紀子	オアシスなべよこ
理事	高橋 博行	中野区福祉団体連合会
理事	渡部 金雄	中野区町会連合会
理事	小野 武	前 中野区民生児童委員協議会 会長

監事

中野いく子	特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所
三浦 龍彦	東京税理士会中野支部

評議員

石井 大輔	中野区地域支えあい推進部
久保 りか	中野区議会
宮内 信子	中野区民生児童委員協議会
大倉 晴子	中野区民生児童委員協議会
佐藤伊津代	中野区保護司会
友利 和江	社会福祉法人 愛成会
宮原 和道	中野区介護サービス事業所連絡会
波多江貴代美	一般財団法人 中野区障害者福祉事業団
高橋 宏治	中野区商店街連合会
酒井 秀夫	一般社団法人 東京都中野区歯科医師会
築地 優子	一般社団法人 中野区薬剤師会

田村 雅子	中野区国際交流協会
飯塚 光子	中野区友愛クラブ連合会
伊藤 由宏	特定非営利活動法人 ここからプロジェクト
見尾田 直	特定非営利活動法人 グリーンバード
鈴木 照男	東京中野ライオンズクラブ
服部 幸子	中野区赤十字奉仕団
加藤 洋右	中野区町会連合会
高橋佐智子	中野区町会連合会
森川 洋	帝京平成大学 人文社会学部
佐谷けい子	特定非営利活動法人 シンプル

中野区社会福祉協議会職員

事務局長	奈良 浩二
事務局次長	秋元 健策

経営管理課

【担当事業】 ● 法人運営・企画広報 ● 要介護認定調査事業 ● 社会福祉会館管理

【職員】	課長 小山 奈美 <鷺宮圏域担当>	佐藤 恵美
	課長補佐 大友 昌一	吉原 智子
	平野香菜子 <弥生>	飯原 薫
	綱嶋 海良 <野方>	

地域活動推進課

【担当事業】 ● 中野ボランティアセンター ● 福祉何でも相談・ひきこもり支援事業 ● 避難者の寄り添い支援事業
● 中野区小学生学習支援事業 ● ほほえみサービス事業 ● 犯罪被害者等緊急生活
● 高齢者困りごと支援事業 ● 中野区ファミリー・サポート事業 サポート事業

【職員】	課長 出竹 美奈 <中部圏域担当>	池本 彬子	持田 尚子
	課長補佐 丸山建一郎 <江古田・北部圏域担当>	後藤 将来	築島 奈生
	課長補佐 関 真実 <桃園>	長谷川純子	高沢 望美
	野口 真世 <沼袋>	永嶋 春美	清水この美
	久保 賢人 <新井>	高橋 茉鈴	石井 文郁
	津田 優 <東部>	渡邊 吏里	高橋 翔
	二瓶 良恵 <大和>	和田 恵	前澤摩周美
	長内 勇介 <鷺宮>	石亀 和子	

あんしん生活支援課

【担当事業】 ● アシストなかの(権利擁護事業) ● 法人後見・法人後見監督事業
● あんしんサポート事業 ● 生活福祉資金貸付事業
● 中野区成年後見支援センター ● 受験生チャレンジ支援貸付事業

【職員】	課長 黒木俊一郎 <南部圏域・北部圏域担当>	依田 晴美
	課長補佐 草野 由佳 <鷺宮圏域担当>	近藤久美子
	課長補佐 山田瑠理子 <南部圏域担当>	黒羽富美子
	課長補佐 宮島 有 <中部圏域担当>	安田あやか
	増永めぐみ <昭和・東中野>	西林 茉央
	高松 夕夏 <上鷺宮>	若王子文人
	松尾 俊司 <上高田>	北野 晃司
	三谷 勇輔 <南中野>	辻田 直子
	龍蘭 華世 <鍋横>	元倉美智子 弁護士
	比嘉 沙織 <昭和・東中野>	後藤真紀子 弁護士
	乙訓 祐子	

社会福祉法人 中野区社会福祉協議会

創立70周年記念誌

令和 5 年 11 月 9 日発行

〔企画・編集・発行〕

社会福祉法人 中野区社会福祉協議会

〒164-0001 東京都中野区中野5丁目68-7

電話 03-5380-0751

〔編集・デザイン・印刷〕

三報社印刷株式会社

※本書の内容はすべて、著作権上の保護を受けています。
本書の一部あるいは全部について、社会福祉法人中野区
社会福祉協議会の許諾を得ずに、いかなる方法においても
無断で複写、複製する事は禁じられています。